基本形動詞文表出用法について

近　藤　研　至

0　はじめに

ある刺激を受けた直後に「あ！」や「うわ！」のような感動詞を表出する場合があるが、表現内容を有する、

(1) a　あつい！　・　長い！　／　b　あつ！　・　なが！

(2) a　ドロドロだ！　／　b　ドロドロ！

のような表出を行う場合もある。このような表現を、近藤（2019）・(2021)では、形容詞文、形容動詞文の「表出用法」と呼び、表出用法には、それぞれのａのような「終止型」と、(1)bのような「イ落ち型」、(2)bのような「ダなし型」があると報告をした。

動詞文にも表出用法がある。しかし動詞文の場合、動詞の性格上、表出用法は形容詞文、形容動詞文とは異なった特徴を持つ。一つはその時生じた感情・感覚や知覚した性質ではなく、知覚した事態（の叙述）を差し出すというものである。これは動詞が負担する意味的な側面と関係する問題である。その他、形態的な側面として、二つの特徴を持つ。一つは、「イ落ち型」、「ダなし型」のような、語尾が現れない形態を、動詞文は（活用の関係から）持たないという点である[1]。

(3) *はし！（走る）　／　*おち！（落ちる）

もう一点、動詞文の表出用法の典型的な形態は、「基本形ではない」という点である。表出用法は、知覚と表現とが同時的であるため[2]、形容詞文、形容動詞文では、語尾が現れている場合は、基本形による「終止型」である。しかし動詞文の場合、発話時においてそれぞれが実現していることを示すためには、基本形をとることができずに、

1　サ変動詞の場合、例えば「ずきずきする」が「ずきずき！」とか「転落する」が「転落！」とか「ゲットする」が「ゲット！」というように、語幹だけで述べられる「スルなし型」もある。これらはシテイル形、タ形、基本形のどの形態と対応しているのかは単純ではない。またサ変動詞の場合は、形容動詞文との親和性が高くなることもある。こうしたことについては、(例文（４）の形態も併せて)「動詞文の表出用法」として稿を改めて論じる。

2　近藤(2014)では、この同時性のため、文法形式としてのテンスを顕在化する必要がないことから、「イ落ち型」「ダなし型」があるということを指摘した。

(4) a　走った！　／　走ってる！
　b　変わった！　／　変わってる！
　c　あった！
　d　そびえてる！

のように、テンス、アスペクトの形式としては、タ形あるいはテイル形をとる。このことは、例えば金田一(1950)によって分類される、継続動詞（a）、瞬間動詞（b）、状態動詞（c）、第四種動詞（d）の、どの動詞のタイプであっても同様である[3]。

しかし、次の基本形による表現はどうであろうか？

(5)　（ドアが開くかどうかわからず、試しにドアノブを回してみると開いたときに）
　あ！あく！

これは基本形であるが、ドアの属性を知覚しての表出用法と言ってよいだろう。このように、動詞文においても基本形による表出用法があると言える。しかし、動詞文の場合は、表出用法の典型である基本形による一語文の形態では、

(6) 走る！　／　変わる！　／　こぼれる！　／　いく！

というように、表現時において未実現の事態を表し、表出用法の性質とは異なる性質を帯びることになってしまう。しかし(6)の表現は、未実現だと言っても、

(7) a　イデは2年後に結婚する。
　b　イデは毎日テレビショッピングを見る。
　c　タイヤは摩耗する。

などが表す「未来」(a) や「慣習」(b) や「属性」(c) とは異なっている。(6)は(7)に比べて表現時と事態の成立時がもう少し接近している表現で、これまでのテンス・アスペクトの研究の中でも、特殊なあり方として指摘されている表現である。こうしたことから小論では、(6)のような表現は表出用法と非常に近似的であるとし、(5)や(6)のような表現を、動詞基本形による動詞文の表出用法として取り上げ、考察を行う。

---

[3] 状態動詞の場合はテイル形を、第四種動詞の場合はタ形をとらない。

1　動詞基本形による一語文[4]と表出用法について

表出用法は基本的に一語文の形態をとる。まず、こうした一語文の形態をとる動詞文をあげ、その中から表出用法であると言える表現のタイプを定位しよう。

動詞の基本形の一語文には、次のようなタイプが指摘できる。

(8) a　落ちる！
　　b　いる！
　　c　書ける！
　　d　（明日から）やる！
　　e　（ぼくが）行く！
　　f　（あなたが）読む！

(8) a は、今まさに落ちそうな状態を捉えて、その直後に落ちる事態が起きることを予測して思わず言う場合。(8) b は、「いないかもしれない」という想定を持っている場合の時と、まったくそうした想定を持っていないときという二つの場合があるが、「いる」ことに気づいて、その瞬間に言った場合。(8) c は、それまで「書けないだろう」あるいは「書けるかなあ」と思っていたボールペンを手に取り、試しに書いてみたとき、そのボールペンが「書ける」ということを知覚して思わず言う場合。(8) d は、明日から「やる」という意志を表明する場合。(8) e は、自分が「行きたい」ということを(みんなに向かって)表明する場合。(8) f は、相手に対して「読む」ことを命令する場合。今、(8) a を「将然」[5]、(8) b を「状態」、(8) c を「属性」、(8) d を「意志」、(8) e を「情意」、(8) f を「命令」と仮称しておく。このように動詞の基本形による一語文は、形容詞文、形容動詞文の一語文とは異なって、発話・意味的なバラエティが豊富である[6]。

表出用法は、事態（感情・感覚、様態も含む）を知覚するとほぼ同

4　森山(1997)は「どのような語であってもその一語だけで発話されれば結果的に一語文になる」としながらも、述語成分の中核的な語だけで一語化している場合は、「他の部分が省略されている」などがあることから、形容詞、動詞の一語文を、一般化して一語文として扱っていない。

5　金田一は、「シヨウトシテイル」という形式について、作用がまだ起こらないが起こる前の状態にあることを指しているとし、それに「将然」という呼び名をあてている。

6　他にも「え？長い？」のような形容詞文の疑問表現も、一語文と言えば、一語文かもしれない。しかしこうした疑問表現はこれまで表出用法として扱ってこなかった。動詞文にも、同様に「え？走る？」のような表現もあるが、形容詞文同様、扱わないことにする。なお、こうした表現については近藤(2001)で詳述した。

時にその知覚したことを表現するために、表現と事態の実現の関係が即時的である。また誰かに何かを伝えるという表現性を持たないために非伝達性を帯びている。「情意」と「命令」については、伝達性を帯びていることから、表出用法から除外される。また、「やる」という意志は表現時に抱いている意志であるが、事態の実現は表現時と切り離されていることから双方は即時的な関係にない。「将然」と「状態」と「属性」は非伝達性を有し、表現と事態の関係が即時的であるため、表出用法[7]として認定できる。

2　基本形動詞文表出用法の形態的・統語的特徴

基本形動詞文表出用法は、形態としては（基本的には）一語文の形態をとるのであるが、

(9)　お湯、こぼれる！

のように、項が明示される場合もある。その場合は助詞を後続させないで導入されていることがほとんどであり[8]、こうした表現は一語文の範疇であると考える。また一語文の定義にもよるが、いくつかの文法カテゴリーは一語文の範疇として捉えておく。

(10)　やられる！　／　「（隠れていて観察しているとき、相手と目が合いそうな雰囲気を察知して）あ、見られる！」

(11)　（テレビで、ワサビたっぷりの寿司を食べさせるという企画を見ていて、いよいよ、それを食べさせる瞬間に）お、食べさせる！

といったヴォイスに関する文法形式は、事態をどの方面から知覚したかに対応した形式であるため、判断を表しているわけではなく、これも一語文の範疇とする。

統語的な特徴としては、表出性と非伝達性から、次の特徴を持つ。

まず、表出性を持つということは、判断過程を経ないまま発話されているということであるため、

(12)　*あくだろう！　／　*変わるかもしれない！
　　*食べるそうだ！

のように、いわゆる判断系のモダリティは現れないという特徴がある。

なお、「イ落ち型」についてしばしば指摘される「否定辞を持たな

7　以下、「基本形動詞文表出用法」と呼ぶ。

8　形容詞文のこうした特徴については近藤(2014)、清水(2015)で、形容動詞文の特徴については近藤(2021)で指摘されている。

い」という特徴は、

(13)　a　(「開く」と思っていて、ドアノブを回してみて)

あ、あかない！

b　(「あふれる」と思って、ぎりぎりあふれなかったとき)

あ、あふれない！

のように、語尾を持つ基本形動詞文表出用法には現われることがある。これは語用論的な背景による。(13)の（　）の中の下線を引いたような想定が、知覚に先立ってある場合、そしてその前提になる想定とは異なった知覚がなされたとき、否定辞を伴うことになる[10]。知覚した事態をそのまま表出するということは、知覚に先立つ想定が全く反映しないということとは一致しない。

非伝達性という性質から、「丁寧さ」を表す形式や伝達に関わる終助詞など、聞き手への「配慮」に関係する形式が現れないという特徴を持つ。ただし、一語文としては、

(14)　落ちます！　／　変わります！

(15)　いくよ！　／　帰るね！

のような表現はあるが、こうした「聞き手配慮」の形式が現れた表現は、表出ではなく伝達を、強い調子で行っている表現と言えるだろう。

3　テンスから見た基本形動詞文表出用法の二つのタイプについて

仁田(2019)は事態の意味的タイプを動き・状態・属性に分け、それぞれのタイプを時間との兼ね合いの中で次のように説明している。動きと状態は、「具体的な一定の時間帯に出現・存在する事態」であるとし、それに対して属性は、「基本的に属性の所有者とともにある事態」であるとする。そして、「事態の存在が一時的である」ということを「時間的限定性を有している」として、動きと状態については「時間的限定性を有している」のに対して、属性については「属性そのものが時間的限定性を持つことはない」としている[11]。

9　冨樫(2006)、今野(2012)で指摘されている。

10　こうした語用論的条件があれば、形容詞文、形容動詞文においても「丸くない！」「熱くない！」「ドロドロじゃない！」「親切じゃない！」という表現も可能である。「イ落ち型」「ダなし型」にそれがないのは、統語的な問題と言うより、語用論的な背景を問題にせず、知覚した状態、属性をシンプルに差し出すという表現であり、そうした表現であるため、概念を負担する部分のみを差し出し、活用に貢献する語尾を明示しないという形態をとることによる。

11　以上の仁田(2019)の引用は、すべてｐ57からである。

仁田は、日本語学の従来の知見をまとめ、状態動詞の基本形は現在を表し、動き動詞の基本形は、「具体的な現象として現れる顕在的な動きを表す場合は、未来を表し、繰り返し現れる潜在的な動きを表す場合は、未来も表すが現在を表す」としている。基本形動詞文表出用法もこの指摘を外れることはない。

(16) 落ちる！　／　沸く！　／　食べる！

(17) あ、いる！　／　あ、ある！

(18) 解ける！　／　書ける！

(16)は動きに対応するタイプで「将然」としたが、表現時は、動きがまさに実現する直前であることから、そのため表現されている事態のテンスは未来である。ただし、仁田が動きについて指摘している「繰り返し現れる潜在的な動き」は、それが「繰り返し現れる」と知覚されている限り、表出はない。(17)は状態に対応するタイプであり、(18)は属性に対応するタイプである。仁田は、状態と属性を、時間的展開性を持たないことから、アスペクトを持たないとしている。ただしテンスの点では、状態は（一時的であることもあり、）基本形で「現在」を表すが、属性はテンスを持たないとしている[12]。この指摘自体に異論をはさむことはしないが、表出用法の場合、こうした時間的限定性の問題は反映されない。例えば、(17)と(18)を比べてみたとき、それが表出である限り、どちらも表現時に知覚したことを表出しているのであって、[13]

(19) a　あそこにイデがいる。

　　 b　イデはこの問題が解ける。

という叙述形式での表現とは異なっていると言える[14]。(19)のような叙述形式では、状態と属性における、一時的か恒常的かといった時間

12　以上の内容は仁田(2019)のｐ59の指摘による。

13　(18)は、少し注意が必要である。「解ける」自体は状態動詞であるが、これまであまり得意ではなかった数学の問題に取り掛かって、それを解こうと苦慮しているとき、それが解ける見通しが出現したときの表現である場合、これは表現者本人の動きとして解釈でき、その場合は未来と言えよう。しかし、初めて解いてみた問題がすらすらと解ける状況にあったとき、「よし、解ける！」のような形で発話されたとき、この場合は、「この問題は解ける」という表現者の能力、あるいは問題の属性を知覚しての表現となる。

14　こうしたことは形容詞文、形容動詞文でも同様である。「あ、優しい！」「あ、親切だ！」は、その時の行為によって生じたこと限定であって、「彼は優しい」「彼は親切だ」といったテンスを持たない属性表現とは、少し違う。

的限定性の対立は明確である。それに対して、表出用法においては、状態と属性のどちらも表現時に知覚したそれを、そのまま表出した表現であるということから、その状態は一時的か恒常的かの対立を示していない。いずれも表現時で知覚された状態であり、それが本質的な属性という判断にまで至っているわけでもないことから、二つのタイプを区別せず「様態」として扱うことにする。

以上のように、表現時と事態の成立時との関係から、基本形動詞文表出用法を、動きに対応するのを「将然タイプ」とし、状態・属性に対応するのを「様態タイプ」とし、以下、考察を進める。

4　様態タイプについて

様態タイプは、ある事態の様態を知覚し、即時的に表現したものである。この点は形容詞文・形容動詞文の表出用法と近しく、様態タイプは、表出用法としては典型であると言えるだろう。即時的であることから、動きの場合は、「読む！」よりも、「読んだ！」「読んでいる！」などのタ形、テイル形が表出用法の典型と言えるだろう。しかし状態、属性の場合は、

(20)　a　いた！　／　b　いる！

(21)　a　書けた！　／　b　書ける！

のａ、ｂ双方[15]の間には、表現時において、出来事として捉えているａと、状態、属性として捉えているｂという異なりはあるものの、即時的であるという点での差はなく、結果、典型という点での異なりはない[16]。

様態タイプに現れる動詞は、状態、属性という事態のタイプに対応する動詞である。

状態に対応する動詞の一つは、((20)のような）存在動詞である。ただし存在動詞「ある」と「いる」は、どちらも基本形動詞文表出用法としては（現れないわけではないが）かなり限定的な現れ方をする。「もしかするといるんじゃないか？」とか「いないだろう」といった弱い想定が知覚に先立って活性化されている場合に、存在動詞による

15　これらは、基本形で状態を示す動詞であり、テイル形はそもそも持たない。

16　この点は様態タイプと形容詞文、形容動詞文とが違う点である。形容詞文では「熱い！」と「熱かった！」とは大きな差があり、「熱かった！」は表出用法ではない。そもそも形容詞は、基本形では出来事そのものとして捉えるということができないので、出来事として表現するためには過去において知覚されたものとしてタ形にして表現するしかない。

表出用法が現れる。これは存在を知覚するという、そのこと自体に関わっている。表出用法は事態（の知覚）時と表現時の関係が即時的であるが、そもそも実際の知覚場で、何かが突然現出するというのはなかなかない。存在の突然の知覚は、存在側の問題ではなく、それを知覚する側の問題であると言えるだろう。なお、動詞の分類では、「できる」「要る」も状態動詞とされることが多い[17]。このうち、「できる」は存在動詞よりも表出用法に現れやすい。「できる」という状態は、「Ｘ（ニ）ハＹガデキル」という文型に反映されているように、「できる」能力を所有する対象（Ｘ）の存在が前提になっている。表出される場合も、Ｘの存在の知覚があってのYガデキルという知覚の表出であるため、ある状態の知覚をきっかけとして、その「できる」内容を突然に知覚することは可能だからである。それに対して「要る」はほぼ現れない。それは「要る」ということを即時的に知覚することができないからである。

属性に対応する動詞の一つは、((21)のような）可能動詞である。

(22) 会える！　／　泳げる！　／　打てる！　／　買える！

のように、基本的に、どの可能動詞も様態タイプとして現れることができる。可能動詞文は「私は彼氏に会える」「イデは泳げる」「ボクはボールが打てる」「私はシャワーヘッドが買える」のように「Ｘ（ニ）ハ（Ｙガ）Ｚ（可能である）」という文型である。表出用法の場合、Ｘの存在は前提となっていて、何かをきっかけにその対象の属性を知覚し、同時に表出をするものである。ただし可能動詞は、今この場においてその可能事態が存在するばかりではない。

(23) （電話で彼氏と明日の予定を打ち合わせした後に）会える！　／　（スマホでＨＰを見て、今日行く予定だったプールがやっていることがわかって）よし、泳げる！　／　（一球を打ってみて、次の球について考えて）よし、打てる！　／　（お年玉がいくら貯まったかを数えてみて、ほしい物の価格と比べて）買える！

これらは表現時以後にその可能性（＝属性）を経験できることであるが、こうした可能性(＝属性)の知覚は、表現時においてなされたことには変わりがない。

その他にも、例えば、項が「この床」「このドアノブ」「このテレビ」のときの、

17　日本語記述文法研究会(2007)など。

(24) 滑る！　／　回る！　／　映る！
は、様態タイプと言える。この場合の「滑る」「回る」「映る」は、非対格自動詞としての解釈を受けるが、それぞれにおいて「彼」が項となると「滑る」「回る」「映る」は非能格自動詞の解釈を受け、この場合は様態タイプと（動きを表すことから）将然タイプの両方の場合がある[18]。

また、次の例にみられるように非能格自動詞の場合においても様態タイプの場合がある。

(25) 動く！　／　笑う！　／　飛ぶ！
これらは、動詞自体が有する意味が動きであったとしても、

(26) このミニ四駆、動く！　／　このファービー、笑う！
　　この小鳥、飛ぶ！
に見られるように、時間の流れの中での動きではなく、動きに関わる属性的な様態として記述されているものである。

以上に述べたことから、様態タイプの成立条件は次のようにまとめられる。

① 様態タイプは、表現時において様態を知覚したものでなければならない。

② ①の様態は、状態、属性を表す動詞によって表現される。

この②は、しばしば言われる状態動詞・属性動詞といった動詞の分類そのものを指すわけではなく、あくまで意味的な側面で動詞を捉えてのことである。

5　将然タイプについて

5-1　現在未来について

動きを表す場合の、基本形のテンスについて、未来であると説明したが、

(27) a　明日イデは告る。
　　b　もうすぐイデは告る。
　　c　告る！
は、どれも同じく未来であるが、そこには異なりがある。城田(1998)は、動詞の「未来形」は、「現在(発話と同時に流れる時)に関係するもの」（現在未来）と、「現在と切れているもの」（現在と切れている未

18　これについては注14で述べたことと同じである。

来）に分かれるとしている[19]。この分類に従えば、(27) a は「現在と切れているもの」であるが、(27) b と(27) c は「現在未来」と言えるだろう。しかし(27) b と(27) c には違いがないのだろうか？

鈴木(1979)は、(27) b のような表現を「アクチュアルな未来」とし、(27) c のような表現を「完成相の現在未来形」としている[20]。しかし同じく基本形動詞文表出用法と言っても、

(28) 光る！　／　こぼれる！

などの場合は完成相と言えるが、(27)の「告る」だけでなく、

(29) a　書く！　　／　b　落ちる！

などのように、完成相であるとは言えない場合がある。(29)aは、「書き終わり」までを待って発話されない場合がある。例えば、詐欺を働いている者が、ある契約書にサインをさせようとしている状況において、他の詐欺グループのメンバーが、別の場所でターゲットを観察していたとき、サインすることに慎重であったターゲットがいよいよ字を書くことに差し掛かったその時に発話したものであるなら、この場合の「書く」は「書き始め」を意味している。そのため、(29) a の場合は、完成相とは言えない。また、「落ちる」動きは、（瞬間動詞に思えるが、）ある地点から落下した瞬間を「落ちた」とも言えるし、最終的に落下し終わったその時も「落ちた」と言える。「落ち始め」から「落ち終わり」までがあり、ある局面は「落ちている途中」である。(29) b は、そうしたいろいろと想定される「落ちる」動きの中で、「落下した瞬間（＝落ち始め）」の場合は完成相であるが、「落ちる」が他の場合のときは完成相ではない。

有田(2019) は、(28)や(29)のような場合を、「未来というよりも、事象の開始時に基準時を置いた解釈で、何も妨げられることがなければ直後にそれが終結するという意味での「未来」」(pp37-38)だと説明している。「事象の開始時」という説明は小論が上で指摘したことと

19　城田(1998)の「現在未来」と似た概念として、仁田(2019)は「直後未来」という概念を提示して、「直後未来とは、事態が発話後すぐに生じるというものである。（ 中略 ） 話し手が、動き発生の徴候や端緒を発話時に捉えている」（pp68-69）としている。

20　鈴木(1979)は、「完成相の現在未来形」については、「実例が少なく、依然として位置づけができていない」としており、「アクチュアルな未来」と「完成相の現在未来」の異なりについては、説明をほとんどしていない。鈴木の用例採集が、書記言語によるものであることが、こうした結論を導いているのであろう。小論が扱う基本形動詞文表出用法は、音声言語において現れることが多い。

一致するが、「それが終結する」とされていることで、せっかく「開始時」に着目していながら、結局鈴木と同様に完成相を折り込んでしまっている指摘になる。

5-2　臨界状況と臨界点

動きは、内的な時間の展開にいろいろなタイプがあるとしても、時間の流れの中に位置づけたとき、どの場合にも、「していない状態」から「している状態」へ変化するということを見ることができる。時間の流れの中で変化が起きる、その瞬間の時点のことを「変化点」としよう。変化点はあくまで変化点であって、アスペクトの完成相・不完成相の区別と直接的に関係しない。動きが発生する、その時こそ変化点なのである。

変化点には、それ以前に、変化点に向かって進んでいる「していない状態」の状況がある。この状況を「臨界状況」と呼ぼう。例えば、「ペットボトルのジュースを飲む」という動きを考えてみよう。バッグの中からペットボトルを取り出し、（今なら）マスクを外し、ペットボトルの蓋を開け、飲み口を口元に運び、それに口をつける。ここまででは、まだ「飲む」は発生していない。ここで、その中身のジュースを口の中に流し込んだその瞬間「飲む」が発生し、この時点が変化点である。この変化点以前の、バッグの中からペットボトルを取り出す以前の状況とは異なった、変化に向かってある状況が臨界状況である[21]。

こうした臨界状況の中には時間に従っていくつかの状況があり、その中の変化点間近の時点を「臨界点」と呼ぼう。例えば先ほどの「ペットボトルのジュースを飲む」場合なら、ペットボトルの飲み口を口につけた時点である。臨界点は、それ以前の臨界状況の時点とは少し異なる。時間が一方向にしか流れないことから言えば、臨界状況の中でも変化点に遠い時間にある状況は、その後の時間の流れの中で、変化点に至らないこともある。「(雷が)鳴る」という瞬間動詞でも、相当遠いところにものすごい雷雲が発生している（が、それが低気圧の状況

21　動きには、「飲む」のような、突然その変化点が現れる場合と、「変化しつつある」状況を経て、変化点が現れる場合がある。例えば、「鳴る」や「光る」のような瞬間動詞や「飲む」や「走る」のような継続動詞は、「～しつつある」という状況を持たずにその変化点が現れる。それに対して、「沸く」や「倒れる」のようなタイプの瞬間動詞は、「～しつつある」を経過して、変化点が現れる。このような変化点の現われの違いがあるが、どちらにしても臨界状況があることには変わりがない。

からして、必ず数分後にこちらにもそれがやってくる）という状況と、目の前で稲光が光ったという状況は異なり、後者の場合は雷は必ず（表現者に届く範囲で）鳴る。ペットボトルのジュースを飲むという継続動詞の場合も、蓋を開ける状況では、何かがあればその後に飲むことを止める可能性があるが、口をつけた段階では、ほぼ飲むことを行うだろう。また「死ぬ」のような変化動詞であっても、変化点直前の臨終の状況と、それ以前の危篤の状況では、どちらも臨界状況であるが、変化点が確実に訪れるかどうかという点では異なる。また、「～しつつある状況」を持つ動きも同様である。「お風呂が沸く」において、最近なら給湯スイッチを押し、待っている中で、徐々に沸いてくる。そのうち「あと5分でお風呂が沸きます」などの報告がある。このような報告があった後数分後ならば、確実に変化点は訪れる。しかし給湯スイッチを押すという状況は、その後給湯器に何らかの支障があれば、沸かないこともあるのである。

以上のように臨界状況全体では、その後の変化点が訪れない時点にある状況もあれば、変化点が(確実とは言いきれないが)訪れる時点にある状況もあり、変化点が訪れると言える、変化点直前の時点を臨界点とする。

5-3　臨界点の状況とその知覚

動きには必ず臨界状況がある。臨界状況がない動きはないのである。しかし注意が必要なことは、そうした臨界状況そのものと、そうした臨界状況への表現者の関与とは別であるということである。

例えば、アパートの部屋にいて、突然チャイムが鳴ったことを考えてみよう。この場合は、住人にとっては予告もなく「突然」起きた事態かもしれないが、チャイムが鳴ったのは、そのチャイムを鳴らすために、それを鳴らす人がドア近くまで近寄ってきて、腕を伸ばし、指をチャイムにあて、それを押すという一連の事態（すべて臨界状況にある事態）の結果である。こうした臨界状況が時間の流れに従って起きなければ、変化点は訪れないのである。しかし部屋の住人にとっては、そうした一連の事態を把握していないことは大いにあり得る。ただし、たまたま窓を開けていて、人が近づいてくることが見えたり、部屋のドア近くにいて、誰かが近づいてくる靴音が聞こえたり、玄関口でなんか話し声が聞こえたりすることを知覚していることもある。そしてその後にチャイムが鳴った場合、住人にとって、臨界状況を知

覚していたことになる。表現者は、こうした臨界状況にいて、その状況が知覚できていれば、臨界点、ならびに変化点の訪れは予測ができ、「突然」という認識は起きないのである。なお、「チャイムが鳴る」ことは、このような「チャイムを鳴らせる行為」の結果起きる事態なのであるが、その「チャイムが鳴る」の知覚は表現者による知覚であるため、その臨界状況は上で書いた一連の行為に限らない。例えば、「その部屋のチャイムは、鳴る前に必ずブーンという音がして、その1秒後に鳴る」ということを、表現者は知っているとき、その「ブーンという音が鳴る」こともまた「チャイムが鳴る」の臨界点の状況と言えるのである。

また、「穴があく」という事態の変化点について考えてみよう。「靴下に穴があく」ならば、必ず「穴があく」に至る、たとえば生地が薄くなってきたなどの臨界状況がある。そして「あく」直前の臨界点もある。しかし、「靴下に穴があく」場合は、臨界状況は知覚できても、臨界点の状況は知覚しにくい。ないわけではないが、滅多なことで「靴下に穴があく臨界点」の状況を知覚できない。しかし、「木っ端に穴があく」については事情が違う。「木っ端に穴をあける」ために、ドリルを持ち出して、電源を入れ、そして木っ端にドリルの先をあて、ねじ込む。すると穴があく。この場合は臨界状況も臨界点の状況も知覚できる。

以上のことから次のことが言える。

(30) 臨界状況、臨界点の状況はそれ自体として存在するが、このことと臨界状況、臨界点の状況を表現者が知覚しているかどうかは別のことである。

この（30）は次のことを包含する。

(31) 予測する事態の臨界点の状況がどんな状況であるのかは、表現者は自身の経験によって形成している。

例えば、子供が平均台の上でふらふらしている状況は、ある表現者にとっては「落ちる」の臨界点にある状況だと認識しているかもしれない。しかし、子供の体操を指導している人にとっては、この状況では「決して落ちることはない」という認識があり、それは臨界点にある状況であるとは認識していないかもしれない。また、このふらふらしている状況を臨界点だと認識している人であっても、その状況が続く中で、これは臨界点ではないという想定の変更が行われるかもしれない。多くの事態は、大体の臨界点は共通して認識されているだろうが、

それでも表現者の経験において、それは決定されると言えるだろう。

また（30）は次のことも包含する。

(32) 表現者自身が臨界点にあると認識している間は、臨界点は継続する。

上の例において、平均台の上でのふらふらが続いている限り、表現者においては、「落ちる」の臨界点の状況が継続していると認識されており、

(33) 落ちる！落ちる！落ちる！[22]

というように、将然タイプを繰り返し表現することが可能である。

なお、(30)は、時間的な流れの中で捉えると、次のことが指摘できる。

(34) ある状況の、その直後に訪れる変化が何であるかということについては、表現者の判断に依存する。

例えば、もし、向こうから水が飛んでくる状況にあるとき、表現者は、その時点において、直後に起きる変化（事態）は「濡れる」「かかる」「よけられる」など、さまざま予測でき、どの変化を予測するかは、表現者によって選択されるのである。ただし、「水が飛んでくる」という状況は、そのどの変化であっても臨界状況、臨界点の状況であることには変わりがない。

5-4　将然タイプの成立条件

テンス・アスペクトについては表現時と出来事時の関係に左右されるが、将然タイプの表出用法について考察を進める上では、テンポラルな観点から、次の二つの点が問題になる。一つは、変化点の訪れの予測を、表現者がどの時点に立って行っているのかという点であり、もう一つは、その時点と表現時とがどのような関係にあるのかという点である。

一つ目の点から、将然タイプの成立条件として次のことが指摘できる。

①　表現者は臨界点から変化点を予測していなければならない。

将然タイプの場合は、変化点を予測するのは、臨界点においてでなければならない。臨界状況の時点とすると、変化点の現われとの間に時間的な隔りがある状況もあり、そこでの予測は覆されて、変化点が

22　形容詞文も同様に、「熱い！熱い！熱い！」という表現がある。しかし、動詞文には、形容詞文の（強調的な）「　(熱い時)あちちちち！」と並行的な「落ちちちちち！」という形式の表現はない。

現れないこともあるからである[23]。また、あくまで「予測」であることから、形式上、動詞は基本形になるのである。

二つ目の点からは、次のような条件が指摘できる。

② 予測を行っている臨界点と表現時が、ほぼ同時でなければならない[24]。

これは表出であることを支える条件である。

①と②の条件は、小論が将然タイプと呼んだ表現タイプのテンポラルな性質について、従来の研究が「表現時を基準時として、事態の実現時は未来（直後）である」と指摘してきたものとそれほど違わないかもしれない。もちろん、従来は「基準時」という概念が固定されており、そこから表現時、事態時の関係が指定されるが、小論では変化点を基準として、変化点の予測がどの時点で行われるのかという指摘をしているという違いはあるだろう。しかしこれだけの指摘であると、それは従来のものと大きな違いがあるとは言えないかもしれない。

小論が扱っているのは表出用法である。この表現タイプにはテンポラルな性質だけではない、いくつかの成立条件が指摘できる。

一つ目は、

③ 臨界点が知覚できる事態の予測でなければならない。

という条件である。これは5-3において、「靴下に穴が開く」は、臨界点が知覚できないから表出用法がないと指摘したことによる。これは「臨界点を持たない事態は将然タイプにはならない」ということとは違う。確かに状態動詞、属性動詞が様態タイプにしかならないのは、それが動きではないからなのであるが、動きの中でも将然タイプにならない場合があるのは、動詞や事態自体の問題ではなく、その事態の臨界点が知覚できないからなのである。

③の条件は予測される事態が臨界点を認識できる事態でなければならないということであったが、予測される事態自体についても次のような条件がある。

④ 予測される事態は、表現者にとって知覚可能な事態でなければならない。

---

23 鈴木(1979)の言う「アクチュアルな未来」と「完成相の現在未来」の違いは、臨界状況の時点に立つか臨界点に立つかの違いであると言えるだろう。

24 仁田(2019)は、「動き発生の徴候・端緒の可視化・知覚化が可能・容易」（P69）と述べているが、小論が述べたように、「動き発生の徴候・端緒」は臨界状況と臨界点の違いがあり、臨界点であることが重要である。そうでなければ判断の余地があり、表出はされないと考えられる。

たとえば、思考動詞といわれる次の二つにおいて、

(35)　a　あ、考える！　／　b　？あ、思う！

というように、「考える」については表出用法としてあり得るが、「思う」については、「こう思うでしょ？」という質問に対して、「あ、思う！」のような同意や納得する場合の表現としてはあるが[25]、表出用法としては現れにくい。それは「考える」は知覚可能な事態であるが、「思う」ことは(自身の行為としてしか)知覚できないという違いに依存する。ただし、

(36)　a　話す！　／　b　？言う！

については、行為自体の問題も関わるが、統語上の問題も関わる。内容を伴うことが必須ではない、発語行為動詞である「話す」は許可されるが、「言う」の場合は、内容節（引用節）が必須であり、表出用法としてはなじみにくいと言えるだろう。

予測される事態については次の条件もある。

⑤　変化点において実現を予測される事態は、表現者の「行為」であってはならない。

次の例を参照されたい。

(37)　触る！

ある人の行為を観察している状況にあって、その人が「触ってはいけない」と事前に言われていた貴重な宝飾品に「触る」変化点の臨界点にいるときには、(観察している)表現者は(37)を発話することは可能である。しかし、表現者自らが「触る主体」であるとき、(37)は表出用法にならない。この場合は自らの意志的なコントロールによって「触る」という動きが発生するために、その行為を行うものが臨界点において発話する場合、それを行う意志を表明することになってしまうのである。「触る」はどんな場合の事態としては知覚可能であるのに、表出用法として成立するかしないという点で異なりが生じるのは、⑤の条件があるからである。ちなみに⑤は「事態が表現者自らのことであってはならない」ということではない。少々卑俗な事例で恐縮だが、ＡＶで、そのセリフの中に頻出する、

(38)　いく！[26]

25　こうした例を森山(1997)は一語文と扱っていない。

26　この（卑俗な例である）「表現者自らに起きる」変化であっても、臨界点にあると認識されている限り、「いく！いく！いく！」という③の条件は適用される。

のような例は、自らの体に起きる変化であるが意志的な行為ではなく、これは将然タイプとして解釈できるだろう。

なお、この点は、様態タイプの成立条件と共通する。様態タイプは状態・属性の知覚を表出したものであるが、非能格自動詞が現れても、それが意志を伴わない、動きに関する属性を表している場合には、様態タイプとして許可されるということを指摘した。将然タイプの⑤の条件も、意志が関与しない動きでなければならないという条件を示していることから、「動詞文の表出用法は、意志を伴う事態の表出ではない」という共通した条件を提示することができるだろう。そしてこの条件は、③と④の、「表現者によって知覚された事態である」ということから導出される条件であると言えるだろう。

5　おわりに

動詞には、時間の流れに左右される動きと、それに左右されない状態に対応するものがある。さまざまな述語文の表出用法は、表現と事態成立の関係において「即時的である」という性質を有するのであるが、ここにもまた動きと状態における異なりがある。状態は、動詞で捕捉される事態であるにも関わらず、時間から解放されているために、時間の流れにある動きとは別な性質を持つ。状態を知覚し表出するという点で、形容詞や形容動詞に近しい、「即時的である」という性質を有する。しかし動きの場合は、それが時間の流れの中で捕捉されるだけに、「即時的である」という点に揺らぎが生じる。テンポラルな問題の取り扱いにおいてしばしば言われる「同時的」という指摘は、状態には安定して見いだせるが、動きについてはテイル形以外は不安定である。

「即時的である」ことが不安定であることは、動詞の基本形を述語に持つ動詞文に反映される。この形式について、表現時と事態成立時が「つながっている」とか「同時的」とか「現在未来」とかいう、立ち止まってみるとよくわからないような、少々情緒的な説明がなされてきた。しかし、小論は、こうしたことに批判的な検討を加えたわけでは決してない。それよりも、「即時的である」ということが不安定であることに基づき、表出用法に、将然タイプがあることを指摘した。将然タイプの説明に紙幅の多くを費やしたのは、「即時的」であるということが不安定で、その措定に紙幅を費やさなければならなかったからである。

なお、動きの場合は、動詞文では動きの実現を知覚したことによる、タ形、テイル形による表出用法が典型となるだろう。しかし将然タイプを表出用法の一つとして指摘したことに意味があるだろう。またそうした典型ということから言うなら、基本形で表出が行われる様態タイプを指摘したことは、さらに意味があることだろう。ただし、未だ、動詞文全体の表出用法の考察としては未完である。動詞文の表出用法全体については、稿を改めて論ずることにする。

【引用文献】

有田節子(2019)　「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる３つの問い」（庵功雄他編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す』第1巻　pp25-52　ひつじ書房）

金田一春彦(1950)　「国語動詞の一分類」（金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録　pp5-26）

近藤研至(2001)　「「意外である」ということと「問い返し疑問」について」（文教大学『言語と文化』第14号　pp216-27）

――― (2014)　「「形容詞語基用法」について」（小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』pp136-150　勉誠出版）

――― (2019)　「形容詞述語文の表出用法」（文教大学言語文化研究所『言語と文化』31号　pp31-52）

――― (2021)　「形容動詞文の表出用法について」（文教大学国文学会『文教大学国文』50号　pp16-32）

今野弘章(2012)　「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」（日本言語学会『言語研究』141　pp5-31）

清水泰行(2015)　「現代語の形容詞語幹感動文の構造　―「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として―」（日本言語学会『言語研究』148　pp123-141）

城田　俊(1998)　『日本語形態論』ひつじ書房

鈴木重幸(1979)　「現代日本語の動詞のテンス」（言語学研究会編『言語の研究』　pp５-60　むぎ書房）

冨樫純一(2006)　「形容詞語幹単独用法について―その制約と心的手続き―」（『日本語学会　2006年度春季大会予稿集』pp165-172）

仁田義雄(2019)　「「する」が未来を表す場合」（庵功雄他編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す』第1巻　pp53-73　ひつじ書房）

日本語記述文法研究会(2007)　『現代日本語文法　３』くろしお出版
森山卓郎(1997)　「一語文とそのイントネーション」（音声文法研究会編『文法と音声』　pp75-96　くろしお出版）
Vendler,Zeno(1967)　*Linguistics in Philosophy*.　Ithaca: Cornell University Press.

（本学教授）